

ハイダル・ハーンと近代イラン

黒田 卓

はじめに

ハイダル・ハーン・アムー・ウーグリー(タリヴェルディエフ) Ḥaydar Khān ‘Amū Ūghlī (Tariverdiev)¹⁾は20世紀初頭のイランの政治的激動期に深く関わった革命家でありながら、その活動や思想にはヴェールに包まれた部分が少なくない。それゆえ、彼の経歴のどこに重点を置くかによって、その評価も大きく異なってこざるをえないのである。

ハイダルが立憲革命期(1905-1911年)の活動を回顧したペルシア語回想記²⁾を『*Yādgar*』誌に掲載した‘Abbās Eqbālは、ハイダルの革命活動の主要な動因を「イスラームへの熱情」[Eqbāl 1947a : 62]とし、また同じ雑誌にハイダルの評伝を著した‘Abd ol-Ḥoseyn Navā’īもハイダルが「社会主義の原理を修得すると同時に、イスラームについても多大な関心を寄せていた」[Navā’ī : 36]と述べている。さらに、1973年にハイダルの大部な伝記を世に問うた E. Rā’īnによれば、ハイダルには2つの側面、即ちイラン愛国主義者と国際共産主義者としての側面があるが、ハイダルを「公平の秤」にかけるならば、「民族的・宗教的特質」(khoṣūṣiyāt-e mellī o madhhabī)が重きをなすという[Rā’īn 2535 : 313]。Rā’īnと同じ頃にハイダルに関するいま一つの伝記を上梓した Rezāzāde Malekに至っては、国際的共産主義者としてのハイダルについての論及は皆無に等しく、専ら立憲革命の過程での彼の業績を論証することに殆どの紙数が割かれているのである。これらイラン人作家に共通してみられる傾向は、従って、ハイダルがザカフカース地方でアゼルバイジャン人ムスリムとして青年期を送り、立憲革命にも積極的に参画したことを主たる根拠にして、彼が熱心なムスリムであり、なおかつナショナリストであったと表象することである。

他方、かつてのソ連邦の研究者およびトゥーデ党関係者の著作には、ハイダルがロシア十月革命後の内戦期にインターナショナリストとして活躍したこと、そして「ギーラーン

共和国」内の左派コムニストと対立したことを理由に、「正統的」ポリシェヴィクとみなす傾向が認められる³⁾。例えば、1972年と1973年にそれぞれアゼリー語とロシア語でハイダルの伝記⁴⁾を著した A. I. Shamida は、イラン人史家・伝記作者に通有する欠陥として、ハイダルの人生や活動を国内の社会構造や政治過程と遊離させて叙述すること、十月革命後の革命活動について沈黙ないしは無視していることの2点を指摘した [Shamida 1972 : 8-10] うえて、1917-21年の革命活動こそが「最も輝かしいページ」(än parlak sähifalar)を形づくっていることを力説する [Shamida 1972 : 62]。

また、前記ペルシア語回想記を英訳した A. R. Sheikholeslami は、訳文の前に付した序文においてイラン側、ソ連側研究者とはいささか異なる見方を提示している。つまり、ハイダルに適用しうる唯一のイデオロギー基準はポリシェヴィズムであり、立憲革命の時期にはブルジョワ・ナショナリストと協力したものの、十月革命後には社会主義革命の即時実践を唱えるアジアのコムニストの理論に共鳴し、イランにおけるその実現のために活動した、というものである [Sheikholeslami : 24]。ハイダルのイデオロギー的支柱がポリシェヴィズムであったか否かは、ソ連側研究者の見解とともに十分検討に値する問題であるが、後半部のハイダルが社会主義革命の即時実行を主張したという点は後にもみるように明らかに誤解に起因するものである。

以上のようにハイダルをめぐる評価は錯綜した状況にあるが、どのような見解を採るにせよ、彼の活動をトータルに把握するためには、その生涯を跡づけ、そのなかから浮かび上がってくる問題点をまずは吟味してみる必要があるだろう。そこで本稿では、ハイダルの生涯において分水嶺をなしたとみられる立憲革命の終期—ハイダルに即していうならば1911年春のイラン出国時—を画期とし、その前後における彼の事績を断片的な史料に基づいて追いながら、その活動や思想に何らかの一貫したものが底流していたとすれば、それが何であったかを論じるとともに、彼を取り巻く人的関係にも関説することにした。なお、この作業は筆者が現在進めているジャンギャリー運動⁵⁾とそれを一つの基盤に成立した「ギーラーン共和国」の展開過程—ハイダルはその最終局面に登場し、ジャンギャリー運動の指導者クーチェク・ハーン Mīrzā Kūchek Khān と統一戦線を形成するのだが—を解明するための基礎作業の一環をなすものでもある。従って、1920-21年のいわゆる「ギーラーン革命」に果たしたハイダルの役割に関する議論は、この歴史事象全体の構図のなかでなされるべきだと考えるので必要最小限度にとどめたことを予めお断りしておきたい。

I. 立憲革命期のハイダル・ハーン

(1) ロシア社会民主労働党(RSDRP)との関係

ハイダルは1880年12月20日イラン領アゼルバイジャンのオルミーエの町に生誕した。父 'Alī Akbar Afshār はテヘランで医学を学び故郷の町で開業した医者で、母 Zahrā は裕福な地主の娘であった。ハイダルが6歳のとき、原因は詳らかではないが、一家はザカフカースのオールドゥーバード、エレヴァン、ティフリス、ガンジャを転々とした末に、伝手を頼ってアルメニアのアレクサンドロポーリに居を定め、父親は再び医業に従事始めた。ハイダルは8歳でこの町のロシア人初等学校に入学、5年で同校を修了してから、エレヴァンで中等教育、次いでティフリスで高等技術教育を受け、電気技師免許取得後の1900年頃にバクーに赴き、最初はパイロフ発電所で電気技師として、続いて神話的なムスリム大富豪 Zayn al-Ābidīn Taqīev が所有する工場や油田で機械工やボーリング技術者として勤務した [Tari-verdy : 85-86 ; Shamida 1972 : 15-23]。そして折しも第一次訪欧旅行から帰国途次にバクーに滞在中のモザッファロッ・ディーン・シャー Moẓaffar od-Dīn Shāh がイマーム・レザー廟の発電所にムスリムの技師を求めたのを機に、ハイダルはホラーサーン地方の中心都市マシュハドに移り住むことになるのである [Eqbāl 1947a : 63]。油田労働者の70%以上を占めたムスリム系労働者の圧倒的多数が非熟練労働者であったバクーの状況を念頭に置くならば [Swietochowski 1985 : 39]、ロシア式の世俗教育を受け、専門技術者として就業したハイダルは例外的な履歴の持ち主であったかもしれないが、しかしこのようなキャリア・パターンは同時代の社会民主主義に惹かれたアゼルバイジャン人ムスリムに共通する特徴でもあった⁶⁾。また同時に、ハイダルの場合、家庭内では父親がフェルドウスイー、サアディー、ニザーミーなどの詩句を教えたという挿話 [Shamida 1972 : 19] が示すように、ムスリムとしての文化的素養を会得していたことも看過されてはならないであろう。

ところで、ハイダルの異母弟 M. Tari-verdy が引くハイダルの回想録⁷⁾のなかには、「1898年ティフリス高等技術学校の学生であったときに、そこには RSDRP の党組織が存在しており、私はその一員になった」と記されているという [Tari-verdy : 86]。これはムスリムの同党への入党時期としては異例の早さであり⁸⁾、それゆえ却ってその事実性に疑義が生ずる。ところが一方、ハイダルは自らのペルシア語回想記で、

私がホラーサーンに滞在した11か月の間に、私がロシアからの命令 (dastūr) で一つの政治的党派 (ferqe-ye siyāsī) を組織するためにいくら努力しても、それは不可能であっ

た[Eqbāl 1947a : 68]。

と語り、マシュハドに移った1902年末の時点から既に、ロシアからの指令に基づいて政治的党派の組織化に精力を傾注していたことを証言しているのである。勿論この記述からだけでは、ロシアのいかなる政治組織と連絡を取っていたかは不明であるが、少なくとも彼がイランに到来する以前にロシアの何らかの政治的党派あるいは集団に所属していたことだけは確実であろう。

ハイダルがロシアのどのような政治グループと関係を保っていたかを一層鮮明に物語る事例は1903年10月に彼がテヘランに移動してからの記事中に現れる。ハイダルはテヘランでテヘラン-レイ鉄道会社、イラン保険・運送会社で働いた後、Ḥājī Ḥoseyn Amīn oṣ-Zarb 所有のテヘランの発電所⁹⁾に勤務する傍ら、ウラマーを含む多彩な人々と交友関係を取り結び、1905年末からの立憲運動の昂揚に伴って、公然・非公然という2つの組織系統をもつ政治組織の創設に成功した。公然グループ(houze-ye 'omūmī)の方が民衆の護憲的結社たるアンジョマンの簇生の煽りを受けて分解し、非公然グループの方のみが残存したのである。そして、ハイダルは回想記のなかでその後の事情を次のように説明している。

・ ・その後、私と7名の非公然グループ(houze-ye khoṣūṣī)が残り、我々はロシア社会民主労働党(ferqe-ye ejtemā'iyūn-e 'āmiyūn-e kārgarī-ye rūs)とも関係をもった。ロシアの社会民主党に、テヘランに社会民主主義党派(ferqe-ye ejtemā'iyūn-e 'āmiyūn)が組織され、現存していることが通知された後に、向こう側から私に次のように書き送ってきた。必要な指令がカフカースのムスリムとイラン人の支部に与えられた。君はその支部をテヘランに開設して、彼らとともに活動するように、と[Eqbāl 1947a : 70]。

上に引用した一節から以下の3点が判明しよう。第一に非公然グループを中核とする集団が「社会民主主義党派」と呼称されていた、あるいはハイダル自身がそのように認識していたこと、第二にその組織がハイダルを介してRSDRPと何らかの連絡用チャネルを有していたこと、そして第三に同組織がカフカースにおけるムスリムとイラン人の支部一わざわざ區別して書き分けられていることが示唆するように、恐らく前者はムスリム社会民主党「ヒンメト」、後者はその兄弟党たるイラン社会民主党「エジュテマーユネ・アーミューン」を指すものと思われる¹⁰⁾と協同行動を採ることが期待されていたことである。

ハイダル自身の言明とは別に、もう一つの事例を付け加えておこう。タブリーズ蜂起

が熾烈を極めた1908年末、反立憲派勢力の掌握下にあったホイという町の奪還作戦にハイダルは参加している。A. Kasravī が目撃証人から入手した情報によると、この作戦はバクーの社会民主主義委員会(komīte-ye ejtemā'iyūn-e 'āmiyūn)によって主導的に策定され、また作戦遂行部隊もバクーから直接派遣されたという[Kasravī : 811-812]。一方、タブリーズにいたハイダルの方もほぼ時を同じくしてザカフカースから率いてきた部隊を帯同しホイに進発したが、それにも拘らずこのような動静はタブリーズ・アンジョマンやハイダルとも親交のあった E. Amīrkhīzī の関知するところではなかったのである[Amīrkhīzī : 283-285]。これはハイダルがバクーの決定や部隊派遣の委細を事前に諒解していたことを示している。

以上の事例から窺えるように、ハイダルがある程度恒常的に RSDRP またはその周辺組織と密接な関係を保持していたことはまず間違いなからう。とするならば、ハイダルがイランに到着する以前から RSDRP に帰属していた可能性も強ち否定し去ることはできない。しかしながら、彼が同党メンバーであったことが事実であったとしても、そのことが彼がポリシェヴィズム理論に精通し、それを実践したことを必ずしも意味するものではなからう。何故なら、RSDRP に同時加入していた「ヒンメト」の主立ったメンバーからしてマルクス主義理論を鍛え上げることよりも、むしろ帝政ロシア支配下のムスリム同胞の社会的状態の改善により大きな関心を払い、その点ではムスリム・ブルジョワジーが推進した文化的啓蒙活動への協力さえ敢えて厭わなかったのであり[Bayat : 88-89 ; Swietchowski 1985 : 52-55]、ましてやかかるザカフカースの知的環境を共有していたハイダルが、ポリシェヴィズム理論を知悉し、遠く離れたイランでその実行を試みたとは到底考えられないからである¹¹⁾。にも拘らず、かつてのソ連邦研究者がハイダルの政治行動をポリシェヴィズム理論の基準に従って裁断することは、理論上の原理原則に符節する部分を捉えて「正統的」と判定することと同様、余りにも歴史遡及的な評価方法だといわざるをえない。ハイダルの思想的バックボーンに RSDRP の影響を無視することはできないにしても、我々は当時のイランの政治状況の枠組のなかで、史料上から明らかになる範囲においてハイダルの行動や思想を考察してみる必要があろう。

(2)政治テロルの重視

ハイダルが関係したと伝えられる政治テロルは数多くあるが、そのうち最も衝撃的であったのは時の宰相アミーノッ・ソルターン 'Alī Aṣghar Khān Amīn os-Solṭān の暗殺事件であろう。

1885年に宰相に就任して以来、利権譲渡と対外借款で悪名を馳せたアミーノッ・ソルターンは、モハンマド・アリー・シャー Mohammad 'Alī Shah の招請で1907年5月に再び宰相職に返り咲いた。宰相復帰後、憲法補則の制定をめぐるシャールと国民議会との間に顕在化していた確執・対立を調停する方向を摸索し、議会内に穏健派代議士グループを作り出す一方で、閣内からシャール側近と思しき人物を排除した。ところが、このような折衷的政治手法は、立憲制の破壊を彼に期待していたシャールの不満を増幅させると同時に、急進的改革を主唱する代議士グループとそれを議会外で支えるアンジョマンの猛反発をも招いたのである。こうした政治情勢のなかで、1907年8月31日夜、彼が議事堂から外に出ようとするところをテロ・グループに急襲、射殺され、'Abbās Āqā と名乗る主犯の一人は逃走中に自殺を図った。

この事件はアミーノッ・ソルターンの周囲に結束していたグループを震撼させ、急進派の威信と実力を増加させただけでなく、暗殺者の40日目の追悼集会在10万人規模のテヘラン市民の参加で催されたように、民衆の間にも一方ならぬ影響を及ぼした [Kasravī : 464-465 ; Malekzāde j. 3 : 494-495]。そのせいか、テロルの背後関係をめぐって様々な説が唱えられてきたが、それらを大別すると2つに分類できよう。即ち、アミーノッ・ソルターンと協力関係にあった国民議会議長 Mortazā Qolī Khān Ṣanī' od-Doule とその弟 Mahdī Qolī Khān Mokhber os-Saltane がいう宮廷主謀説¹²⁾と立憲派内の急進的アンジョマンが敢行したという説である。これらに加えて、近年では J. Sheykh ol-Eslāmī¹³⁾ や N. R. Keddīe がイギリス未公刊外交文書を精査した結果、これらの暗殺計画が別個に同時進行していたとする説も提出されている。しかし Keddīe も認めるように [Keddīe : 327]、宮廷主謀説が殆ど明証を欠くのに対して、立憲派実行説の方が史料的裏づけという点では比較的豊富である。ハイダル自らは回想記において、急進的ヴァーエズであった Malek ol-Motakallemīn と Seyyed Jamāl を含む、先述の社会民主主義者 (ejtemā'iyūn-e 'āmiyūn) の秘密グループ (houze-ye makhfi) が暗殺計画を案出し、それを執行委員会 (komīte-ye mojri) に送達、同委員会がハイダルの指揮する4名3組のテロリストで構成されるテロル委員会 (komīte-ye modheshe) に実行命令を下したと述べている [Eqbāl 1946 : 50-51]。他方、Malekzāde は前に触れた2つの説を並記しつつも、ハイダルが挙げた両ヴァーエズを包含する16名からなる国民革命委員会 (komīte-ye enqelāb-e mellī) が暗殺計画の実行命令を執行委員会 (komīte-ye ejrā'īye) に出したことも併せて紹介している [Malekzāde j. 2 : 415-417 ; j. 3 : 470-471]。この相似する記述を結節する証言として、Malekzāde が国民革命委員会の熱心な協力者に名を挙げている [Malekzāde

j. 2 : 418], Mīrzā Moḥsen Najmābādī の手になる覚書¹⁴⁾があるが、このなかで彼は恐らく国民革命委員会と同一ではないかと推定される anjoman-e beyn oṭ-tolū'eyn なる結社¹⁵⁾とハイダルとの緊密な関係を生彩ある筆致で描出しているのである [Rā'īn 2535 : 44-48, 72-73]。しかしいずれにせよ、決定的証拠が発掘されない限り、この事件自体の真相は究明されえないと思われるので、これ以上この議論に立ち入ることを控え、もう少し別角度からハイダルの政治テロルへの関与を考えてみよう。

シャーと議会の対立が激しさの度合いを深めた1908年2月末に、シャーの行列に爆弾が投げ込まれたが、シャーは奇跡的にも無傷で難を逃れた。およそ1か月後の4月8日、ハイダルを含むテヘランの発電所関係者数名がこの事件との関連を疑われて逮捕・拘留されたが、正規の法的手続きを踏まえない強引な捜査方法に議会とアンジョマンが抗議し、結局5月16日、証拠不十分のまま被疑者たちは釈放された¹⁶⁾。しかし、この事件の実行グループを背後で統率していた者がハイダルであったことは現在まで異論のないところである [Kasravī : 543-544 ; Rā'īn 2535 : 90-95]。しかも Malekzāde は、

1325年 Dhiḥeje 月12日 [1908年1月16日]の会議で革命委員会 (komīte-ye enqelāb) は、・・ [中略]・・モハンマド・アリー・シャーを取り除き、国家を彼の汚濁から浄化するために執行委員会 (komīte-ye ejrā'iye) の長であったハイダル・ハーン・アム・オグリーが国民の生命に関わるこの重要事を担当せよとの決定がなされた [Malekzāde j. 3 : 621-622]。

とし、今回は [国民] 革命委員会とハイダルとの連携を明言しているのである。この Malekzāde の記述、先程のハイダルの言明および Moḥsen Najmābādī の証言などを併せ考えるならば、Malekzāde のいう国民革命委員会とハイダルのいわゆる社会民主主義組織の秘密あるいは非公然グループとは同一、もしくは部分的に重なり合う組織であったとの推測が成り立ちうる¹⁷⁾。この推測をさらに補強する材料として、ハイダルの署名入りのモハンマド・アリー・シャーに対する「最後通告要求」(ul'timativnoe trebovanie) と題する声明を挙げることができる¹⁸⁾。シャーが憲法を尊重しなければ「痛ましい運命に陥るであろう」という文字通り最後通告的言辞がシャー暗殺を予告しているのではないかと思われることもさることながら、それ以上に留意すべきはハイダルが表題や本文中で使用している組織の呼称である。自らが帰属する組織を彼が「ペルシア革命委員会」(persidskii revoliutsionnyi komitet) と呼んでいることは、偶然の一致である可能性を一概に否定できないとしても、余りにも Malekzāde の記す名称と類似しているといわざるをえないのである¹⁹⁾。革命委員会と社会民主主義組織が同一、あるいは近似した集団で

あったと想定することが許されるならば、逆にアミーノッ・ソルターン暗殺が革命委員会(または社会民主主義組織の中枢)の意思に基づいてハイダルの率いるテロリスト・グループによって断行された可能性を濃厚にするものといえよう。

ペルシア語回想記の続篇ともいべきロシア語回想記のなかで、ハイダルはモハンマド・アリー・シャーによるクーデタ(1908年6月23日)直後に追手を巧みにかわしてアンザリー港からザカフカースに逃げ延びてからも、なおもシャー暗殺を執拗に追い求め続けていたことを告白している。テヘランに残留した革命委員会(または社会民主党委員会)メンバーとの連絡網を復活させ、「突撃グループ」(gorūh-e zarbat)なるテロリスト・グループを結成させるために、自分の父親‘Alī Akbar Afshār をテヘランに送り込んだというのである。但し、‘Alī Akbar は御者として宮廷に潜入することに成功するが、グループのなかに内通者が出て暗殺計画そのものは頓挫に追い込まれたようである²⁰⁾。

ハイダルの政治テロルへの高い評価は、十月革命後のロシアに移ってからも、一向に変化することがなかった。例えば、1919年4月10日イラン社会民主党モスクワ細胞が主催し、サマラやアストラハンのイラン人居留民代表、赤軍国際部隊代表、在モスクワ「ペルシア市民連合」会員などが列席したモスクワでの集会の席上、ハイダルは「ラジャブ・ボンビー」(因みに「ボンビー」とは「爆弾の」という意味)なる偽名で登壇しその演説のなかで、1917年3月にテヘランで結成され、政府要人や親英派ジャーナリストを暗殺したテロリスト・グループ「懲罰委員会」(komīte-ye mojāzāt)による一連の「赤色テロル」活動に称賛の意を表明し、この組織が「エジュテマーユーネ・アーミューン」(Idzhtimaiun-amiiun)党の「容赦のない武器」であると確言しているのである[“Izvestia” 13 IV 1919: 2]。

RSDRP が政治テロル戦術を採用することを否認していたにも拘らず、ハイダルがかくもテロルに固執し続けた背景にはどのような要因が想定できるであろうか。確かにハイダルのような一介の国外からの移住者にとって、政治の表舞台で大衆の影響力を発揮できる余地は残されておらず、せいぜい地下で人的ネットワークを構築したり、立憲運動を実践的技術的な側面で支援する程度の局限された役割しか演じられなかったとしても当然のことであったかもしれない。そのような事情を考慮に入れるとしても、当時のイランの如く制度化が十分貫徹されていない社会において、政治的領域で個人の果たす役割が破格的に大きかったこと²¹⁾を彼がある程度まで認識していたこともまた銘記しておかなければならないであろう。政治テロルへの直接的言及ではないが、ハイダルはイマーム・レザー廟の管財責任者である motavallī-bāshī への意図的な挑発行為の動機を

ペルシア語回想記のなかで、

motavallī-bāshī も一個の人間であり、天から降りてきたのではなく、彼とも他の階層の人々と同じようなつきあいができるのだということを、・・[中略]・・ホラーサーンの人々に分からせるためであった[Eqbāl 1947a : 65]。

と説明しているからである。個人の恣意的権威の否定、そして政治的個性の交替が、アミーノッ・ソルターンの暗殺がそうであったように、政治地図上の勢力配置を一変させ、民衆のなかにも一定のインパクトを与えうる有効な革命闘争手段の一つであることを彼は一貫して確信していたように思えるのである。

Ⅱ. 立憲革命後のハイダル・ハーン

(1) 第一次世界大戦への参加

旧ソ連の研究者の多くは帝国主義戦争たる第一次世界大戦にハイダルが従軍した理由を「国際労働運動の左派的見解への無知」に求めがちである[Tari-verdy : 88 ; Shamida 1972 : 59]が、果たして戦争への参加の主體的動機をそれだけの理由で説明できるであろうか。そのことを探究するためには、第二次立憲制期の政治動向とそのなかでハイダルがどのような政治潮流に属したかを考えることから着手せねばならない。モハンマド・アリー・シャーの廃位、立憲制新政府再建後の1909年11月に再開された第二次国民議会では、以前から萌芽的にみられた政治勢力の分化傾向がエエテダール(ejtemā'iyūn-e e'tedāliyūn)党とデモクラート(demokrāt-e 'āmiyūn)党という二大政党体制に結晶化した。デモクラート党は議会内フラクションとしては少数党にとどまったとはいえ、王領地の農民への分配、政教分離などの急進的社会改革を政治目標に掲げ、中央委員会を頂点とする階序的党機構を媒介にして地方にも組織化の裾野を広げていった。同党の性格や活動実態をここに詳説する余裕はないが、ハイダルの行跡との関連で最も重要な問題を一つだけ挙げるとするならば、それは同党が党カードルの顔ぶれという点でも政治路線の側面からも社会民主党(エジュテマーユネ・アーミューン)を継受するものであったということである²²⁾。

しかしながら、デモクラート党とハイダルとの関わりを彼自身の証言から再構成することは、もはや回想記がこの時期をカバーしていないために不可能であり、従って若干の限られた状況証拠に依拠せざるをえないのが現状である。この政党とハイダルとの関係を間接的ながら証左する史料の一つに、在タブリーズのアルメニア人 V. Pilossiantz とテヘランにいた S. H. Taqīzāde との間に交わされた一連の書簡群がある。デモク

ラート党創立にまつわる情報の交換や助言を盛り込んだこの書簡群のうちの1910年1月26日付書簡(原文フランス語)において、Pilossiantz は彼の許に寄せられたハイダルの書簡を通じてハイダルがカラ・ダウのシャーセヴァン族 Raḥīm Khān の反乱掃討作戦に出立する意向をもっていることを知り、Taqīzāde に対しハイダルがテヘランに残るべく説得を行うことを要請したうえで、その理由をハイダルが「優れた煽動・組織者」(bon organisateur et bon propagandiste)として不可欠であるとしているのである²³⁾。さらに、デモクラート党中央委員であり、後に浩瀚なイラン・イギリス外交史を発刊したことで有名な Maḥmūd Khān Pahlavī もその回想録のなかで、同党中央委員メンバーを列記した際に、ハイダルがこの党の熱意ある誠実な一員であったことを特記している [Ādamiyat : 334]。またハイダル自身はデモクラート党の存在意義のある党関係者に宛てた書簡(日付不明)のなかで次のように披瀝している。

明確な路線(maslak-e mostaqīm)をもつ統一した党派が政権を手中に収めない限り、そして道標を示し苦難の盾にならない限り、この国の状況は良くはならないし、その独立も安定したものとはならないであろう [Eqbāl 1947a : 77]。

これらの情報を総じて判断するなら、実情や程度を精確に把握できないものの、ハイダルがデモクラート党結成の草創期段階からこの政党の中枢部に深く参与していたことだけは確かである。しかし彼の同党における活動は、社会民主党においてそうであったように、そして Pilossiantz も指摘する如く、党イデオログとしてよりも、むしろ各地を巡歴する煽動・組織者として顕著であったようである。同党のホラーサーン地方委員会が1910年10月頃に作られたのが彼の教導によるものであったこと [Bahār : 序文の h 頁]、イラン出国直前の1911年春にテヘランから南方のコム、カーシャーン、エスファハーンを遍歴しつつその旅程中で各都市に党組織の礎石を置いていったこと²⁴⁾などは彼のこのような一面を例証していよう。

Moḥammad Valī Khān Sepahsālār 政権(1911年3月成立)の国外退去勧告に従い、ハイダルはヨーロッパに向けて旅立った²⁵⁾が、その後の彼の足取りを的確に追跡することは困難である。1912年初めにプラハで開催された RSDRP 第6回全露協議会に合流し、レーニンと会見したという説 [Shamida 1970 : 13-14 ; Shamida 1972 : 56-57] もあるから、あるいは旧知の間柄にあったポリシェヴィキ活動家と交流を深めたのかもしれない。しかし現存する文献から判明する限り、彼の行動を主として規定していたのは、1911年末の立憲革命壊滅後にオスマン帝国および欧米諸国に避難した亡命イラン人、とりわけデモクラート党関係者との頻繁な接触であったように思える。なかでも同党の実質的指導

者で1910年7月以降国外亡命を余儀なくされていた Taqīzāde との間には連絡ルートが存したようで、1912年4月22日付パリ発のハイダルの葉書[Afshār : 606]からは既にそれ以前に彼らの間で書簡が交換されていたことが推察され、また同年9月3日付デンマークのオーステンデ発のハイダルの書簡[Rā'in 2535 : 目次の前に付された書簡写真版]からは Taqīzāde が構想していたデモクラート党亡命指導部の確立をハイダルが積極的に支持していたことが窺い知れるのである。この構想はドイツ外務省の後援で1915年中頃にベルリンで発足した「イラン委員会」(Persische Komitee)²⁶⁾に結実したらしく、同委員会会長 Taqīzāde の呼び掛けに応じてイスタンブル、パリ、ロンドン、ローザンヌなどからデモクラート党関係者が陸續とベルリンに参集した。ハイダルも1915年10月27日にパリからベルリンに到着し、同年12月1日にはウィーン、イスタンブルを經由してバグダードへと向かった[Qazvīnī : 179]。これは彼自身の発意によるものでなく、高名な近代文学者 M. A. Jamālzāde の述懐するところによれば[Rezāzāde Malek : 216]、「イラン委員会」の特命に基づくものであった。バグダードでハイダルは連合軍側との戦闘に備えてオスマン軍の配下にクルド人やアラブ人などからなる混成義勇兵部隊を編成したが、独土現地指令部との軋轢や英軍の前進という状況下で目覚しい戦果を収めることもなく、最終的には1916年10月13日にベルリンに帰還した[Qazvīnī : 182]。そしてしばらく同地に滞在した後に、1917年5月27日デンマークへと出発し、スウェーデン、フィンランドを経て十月革命後のロシアに姿を現すことになるのである[Qazvīnī : 185]。

(2) ソヴィエト・ロシアでの活動

ロシアにおけるハイダルの足跡を辿ることは、知見の及ぶ限りでの情報が零細であることも相俟って一層難渋を極める作業となるが、ここではまずそのおおよその輪郭を描いてみることにしたい。彼のロシア滞在期は1917年12月頃から1919年末までの主にペトログラートやモスクワなどのソヴィエト・ロシア中心部に居住した時期と、中央アジアやザカフカースのようなムスリムが集住する地域で活動を展開し、最終的に1921年春にギーラーン地方に到来するまでの時期との2つの時期に区分することができる。

まず前半期の特徴を概観しておこう。ハイダルは1918年初めに民族問題人民委員部の下に創設された中央ムスリム人民委員部の一部局たる国際宣伝部に属し、同年11月にロシア共産党(ボ)中央委員会の付属機関として設置されたムスリム共産主義組織中央ビューローの活動にも参画したといわれる[Tari-verdy : 88 ; Shamida 1972 : 67]。中央ビューロー下のイラン部は1919年2月までに文化・教育部と煽動・組織部という2部門

を擁する組織として整備されていく [Blank : 174-175] が、このような機関が推進した企画や事業にハイダルがどのような形で関与していたのかは目下のところ不明である。とはいえ、一連のムスリム・コムニストの国際主義的機構に所属したことが事実だとするならば、やはりこれは彼の活動経歴に新たな一ページを付け加えるものといえよう。しかしその反面、彼が従前同様の活動パターンを維持していたことも見逃すわけにはいかない。何故なら、ハイダルは内実は判然としないものの、イランにおけるそれと同じ名称の「エジュテマユーネ・アーミューン」党モスクワ細胞の議長にも就任していたからである²⁷⁾。さらに注目すべきなのは、十月革命以前から既に存在していたと思われる「モスクワ在住ペルシア市民援助のための連合」(Soiuz dlia okazaniia pomoshchi persidskim grazhdanam v Moskve) と呼ばれるイラン人同郷団体の議長職に遅くとも1919年8月頃までに着任していることである。この組織はサラトフ州国立中央文書館で発見された規約によれば、モスクワ在住の貧しいイラン人同胞に対する衣服・食糧の供与、金銭的補助、病人への医療援助などを主目的とする無党派的の団体であった [Khairutdinov : 13]。ソヴィエト・ロシアに活躍の場を移した以上、ポリシェヴィキ党の枠組のなかに自己の活動を収斂させ、党務に専念することも全く不可能でなかったにも拘らず、そして社会主義思想を浸透させんとする何らかの政治的企図があった可能性を排除できぬとしても、ハイダルが依然としてイランという民族名称を冠する党派や団体に拘泥し続けたことだけは以上のことから明らかであろう。

次に後半期に視線を転じてみよう。1919年末にハイダルがトルケスタンに出向いた理由の一つは、10万人を数えた中央アジアへのイラン人移住者を白衛軍との戦闘に参加させるために、イラン人国際部隊を編成することであった。1920年2月にハイダル自身が提起し、同年4月25日付のトルケスタン戦線に関する指令187号によって実現した [Plastun : 62-63] この国際部隊の創出は、旧ソ連の研究者が一面的に強調する、「干渉者と反革命分子」からソヴィエト権力を擁護することのみを目的にしたのではなく、ホラーサーン地方駐留イギリス軍が張りめぐらせた「東部ペルシア哨兵線」(East Persia Cordon) を突破し、イラン本国への進撃を企てることをも意味していたようである。イギリス軍側の諜報報告によると、1920年6月10日にアシュハーバードに到着したハイダルを始めとする「アダーラト ('Adālat)」党(後述)幹部らは、革命文献や密使を送り込み、クルド部族の Khodā Verdī に反乱を起こすよう使喚するとともに、国境付近に数千名に昇るイラン人部隊を集結させた。しかしながら、イギリス軍との全面衝突にも発展しかねないこのような動きがロンドンで進行中の英ソ通商交渉に悪影響を与えることを憂慮

したモスクワおよびタシュケントのソヴィエト当局は、8月初めにホラーサーン地方からイギリス軍が撤退したにも拘らず、国境を越えた進軍の中止を厳命するのみならず、10月中頃には命令に服さないイラン人部隊とこの地の「アダーラト」党組織の解体を強行したのであった[Sobahi: 103-107]。

軍事的動員の他にハイダルがトルケスタンに赴きたいま一つの理由は、恐らく「アダーラト」党に合流するためであったと思われる。サマラを経由して1920年3月頃にタシュケントに入ったハイダルは、同地で4月1日に開催された「アダーラト」党第1回地方大会に臨席した。「アダーラト」党は「ヒンメト」の兄弟党として1917年5月にバクーのイラン人移住労働者を中心に結党されたが、1918年7月のいわゆる「バクー・コミューン」瓦解後、活動の拠点を喪失していた。しかし同党は1919年3月に非合法下に大会を開いて新指導部を選出し、翌20年1月には組織委員会を構成していた A. スルターンザーデ²⁸⁾、M. アリハーノフらを中央アジアでの党活動強化のためにタシュケントに派遣した。従って、この大会はスルターンザーデを筆頭とするバクーの活動家に終始領導され、スルターンザーデ提案の「シャー政府とペルシアにおける社会革命の展望」なる政治報告およびアリハーノフ提案の「ペルシアにおける我々の戦術」なる活動報告が討議・採択されたのである²⁹⁾[Plastun: 55-60]。この頃既にスルターンザーデとハイダルとの間に何らかの見解の相違が表面化していたかどうかについては不分明なところも多いが、大会後ハイダルは既述の通りイラン国境に向かって南下し、スルターンザーデが主導し、1920年6月22日からアンザリーで開かれたイラン共産党「アダーラト」創立大会³⁰⁾にも遂に登場することなく、同年9月初旬のバクー東方諸民族大会に出席するまでアシュハーバードにとどまり続けたのであった[Ravasani: 257]。

Ⅲ. 革命観と人的関係

(1) ハイダルのイラン革命観

ハイダルはスルターンザーデとは対照的に、勝れて行動先行型の人物であったとはいえ、そのような行動の背後にあった革命観を垣間見せるような記録が僅かながら残されている。その一つはコミンテルン創立大会(1919年3月)に際して催されたペトログラート労働者国際集會での演説であり、これは R. Rüstā の論文に所引のペルシア語訳を通してその全容を知ることができる³¹⁾。二つ目はバクーの東方諸民族大会での発言で、その一部が N. S. Fatemi の著作に英訳で引用されている。そして最後のものは1920年6月15日付の「諸民族の生活」紙に載録された「ペルシア革命の社会的基盤」という表題の短い

論説であり、イランの実状を比較的正確に踏まえて書かれていること、末尾の G. T. なる署名が Geidar Tariverdiev の頭文字の組合せであると同定できることから、これはハイダル自らが執筆したものとみてまず差し支えなからう³²⁾。これらに加えて、時期的にもほぼ同じ頃に公表され、しかもイラン自体に照準を定めて政治、社会・経済の現状分析とそこから導出される革命展望を詳論したスルターンザーデの「ペルシアにおける革命運動」(「諸民族の生活」紙 9～10月に3回に分けて連載)を対比の素材として、ハイダルの革命観を探っていくことにしたい。

バクー大会の最初の発言において、ハイダルは人類を真に分かつ基準が人為的で可変的な民族性や国境ではなく、所有を基軸とした階級であることを断言してみせる [Fatemi : 170]。ところが、同大会 5 日目の 2 度目の発言を聞く限り、これは一般論、あるいは欧米諸国にのみ適用可能なものとして語られたと推断せざるをえないのである。というのも、彼はイランを「ゾロアスター教の故国、偉大な文明の発祥地、イスラーム的諸活動の最も隆盛な中心地」と描いたうえで、イラン人を「男らしく、勇敢で、知的かつ文化的である」と誉め称え、「イギリスから解放されれば、イラン人は自分の家を秩序正しいものとし、自足的な生産を行うことも可能」などと述べ、ことイランに関しては露骨ともいえる、ナショナリスティックな色調の見解を披露しているからである。この発言が一部のポリシェヴィキ代議員の失笑とブーイングを買ったのもけだし当然のことであったかもしれない [Fatemi : 171-172]³³⁾。

次にハイダルが立憲革命を総体としてどのように評価していたかをみておこう。ペトログラート集会の演説でイランにおける革命運動を振り返った際に、ハイダルは革命運動の果実として現出した憲法と立憲制が永続しなかったのは、「外国帝国主義者が立憲制や自由や憲法の存在に耐え切れず、イラン革命の自由を奪うことを決定したからだ」と指摘して、立憲革命を主に外在勢力によって「中断された革命」として捉えている [Rüstā : 67]。これに対して、スルターンザーデは革命過程への英露両国の干渉に触れながらも、革命が破砕された根源的要因を「農民大衆の結合の不十分性」と「指導的中核の不在」のなかに見出し、このような内在的弱点のゆえに、労農大衆にとっては「革命は何の成果も上げられずに終息した」のであり、「唯一の積極面はそれが階級分化を急激に加速させたこと」であったというように、革命を主として階級的布置関係の視座から分析するのである [Sultan-zade “ZhN” 29(86) : 1]。

両者のこのような立憲革命への評価をめぐる微妙な差異は、来るべきイラン革命の性格にも関連してくる。イラン共産党「アダーラト」創立大会の一週間前に発表された論説

のなかで、ハイダルはまず「ロシア人やアゼルバイジャン人労働者との連帯」という「外部勢力の有利な状況の一定の影響下にあるラシュト政府[つまり「ギーラーン共和国」]は、恐らく長期にわたって人民権力の座にとどまれないであろう」と大胆に予言し、それに代わって来るべき革命がいかなる社会的基盤に立脚すべきかを自問して、大・中商業ブルジョワジーの一部から都市住民、農民までを包摂する民族的なものと規定するのであるが、その論拠は立憲革命の肯定的評価と軌を一にするかのように、何よりもまずイラン民族運動の諸経験のなかに求められるのである。例えば都市住民については次のように記される。

1907年の革命の経験が示すように、民族革命(natsional'naia revoliutsiia)により積極的に参加するのは都市住民と貧民であり、[それは]彼らの消費の双肩に専売や利権や他のイギリス帝国主義の合法的強奪がとくに重い負担を課すからである。タバコ利権の歴史は—それはペルシアの大都市が暴動を続発させ、都市民がタバコ業の全製品をボイコットすることを宣言し、そしてまたヨーロッパ人に対し脅迫的内容のポスターが掲げられた後に、やっと廃棄されたのだが—明快に都市住民の最下層の社会的利害の特質のみならず、その積極性と民族意識の水準をも反映している[G. T. : 1]。

他方、スルターンザーデはその論文の第三章において、イランの諸政党を分析した後に、イラン共産党が協力可能な政党に僅かに小ブルジョワ的ではあるが、1919年以来のソヴィエト・ロシアの安定化に伴い左派に転じた社会民主党(エジュテマーユーネ・アーミューン)を挙げるのみで、むしろイラン共産党の果たすべき役割の重大性を特筆している。そしてそれに続けて、土地集積が少数者に集中し、ブルジョワジーが脆弱なイランのような国では、土地革命(agrarnaia revoliutsiia)のスローガンが労農大衆だけでなく、小商人や手工業者の要求をも満たすものであり、結果として社会革命(sotsial'naia revoliutsiia)を不可避とする状況を生み出すであろうと結論づけるのである[Sultan-zade "ZhN" 30(87) : 2]。スルターンザーデの明確な土地革命の見通しと比較すると、ハイダルの議論は歯切れが悪く、曖昧なものである。論説では農民が彼がいうところの民族革命の究極的支持者であることが強調されてはいるものの、そしてまた「シャリーアの諸法によれば、土地は全人民に属し、神の被造物にすぎぬシャーはムスリム宗教共同体の秩序と共有財産の維持者にすぎない」というイスラームの原則論が唐突に持ち出され、これに照らしていかに近年農民が地主とその代人(モバーシェル)の悲惨な支配を被っているかが具体例を交えて描写されているとはいえ、そのような状況を打開する方途については、農民アンジョマン—これは農民ソヴィエトと同一視されているが—の組織化が推奨され

ているだけだからである[G. T. : 1]。

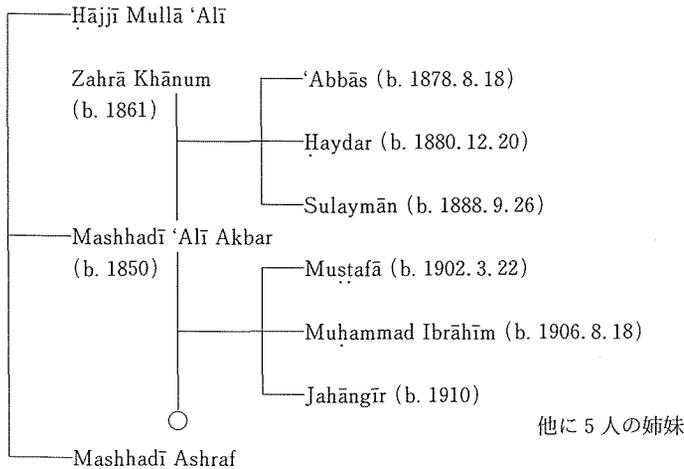
両者の唱えた議論の当否はさておき、少なくともここで確認しておきたいことは、スルターンザーデのインターナショナリスト的な見解に比べれば、ハイダルの革命観がどちらかといえばナショナルな視点を基調にしたものであったということである。もっともハイダルが「民族革命は社会革命に転化する」[G. T. : 1]ことを信じて疑っていない以上、民族革命なる提言も革命戦略の見地からなされていることはいうまでもない。また、当時の政策立案者やポリシェヴィキ幹部の間に流通していた多様な政策的選択肢、東方革命論がハイダルの思考や発想にどのように投影されていたかも勘案せねばならない³⁰⁾にせよ、何故彼が民族革命を第一義的に主唱、あるいは選択したかを考えようとするとき、これまで通観してきたイランでの政治活動の蓄積とそれを介して培われた感性や認識が何がしかの寄与をなしたこともまた閑却できないと思われる。

(2)ハイダルの人的関係

ハイダルの行動を支えていた要素として、前節に素描したイデオロギー的背景と並んで、彼を中軸に据えた人的ネットワークの在り方にも照明を当てておきたい。まず家族構成からみていこう。1908年にアレクサンドロポーリのハイダルの生家に一時逗留した Taqizāde の報告によれば、タリヴェルディエフ家は家長の Ḥājji Mullā ‘Alī を中心にその2人兄弟と彼らの子供たちから構成されていたという[Taqizade : 460]。次頁に示した家族構成図にみられる如く、Mashhadī ‘Alī Akbar と妻 Zahrā との間には3人の兄弟、‘Abbās, Ḥaydar, Sulaymān が生まれ、氏名不詳の第二夫人との間にも同じく3人の兄弟が誕生した。なお、これら6名の男児の他に、母親の区別は定かではないが、5名の姉妹がいたようである。従って、ハイダルは‘Alī Akbar の総勢11人の子供の次男になるわけだが、これらの者たちのうちハイダルの活動への援助と助力という点で最も重要な役割を果たしたのは、実兄のアッバースと実弟のスライマーンである。

兄のアッバースにはロシア語で記された筆者不明の略伝がタリヴェルディエフ家文書中に残されていて、そのペルシア語訳[Rā’in 1358 : 71-75]を実見できるが、しかしこの記録には事実に合致しない点も散見せられるため、全てを額面通り受け止めることはできないにせよ、ただそのアウトラインだけは窺い知れる。それによると、アッバースはオルミーエで初等教育を、バクーで中・高等教育を受けた後、1905年頃にイランに入国し、ハイダルがテヘランに設立した「モジャーヘディーン」組織(ハイダルのいう社会民主党的なことかと思われる)とバクーの「ヒンメト」委員会との連絡役を担い、アミーノフ・ソル

タリヴェルディエフ家の家族構成図



ハイダルの従兄弟

Mūsā Tariverdiev

'Abd ul-Jabbār Tariverdiev*

'Alī Sulṭān Tariverdiev*

'Īsā Tariverdiev

Ḥasan 'Alī Tariverdiev

Timūr Tariverdiev*

Ibrāhīm Pāshā Jahāngīrov

Ḥasan Bek Jahāngīrov (*は立憲革命の過

出典：Rā'in 1358 : 80-1, 234 ff.

Āydīn Pāshā Jahāngīrov* 程で死亡)

ターン暗殺事件の現場にも居合わせたという。暗殺の実行犯の一人であったかどうかはともかく、彼がこの事件に一役買っていたことは、既出の Moḥsen Najmābādī の覚書のなかで、暗殺者 'Abbās Āqā の兄弟 Ḥasan Āqā の隠匿を彼が Moḥsen に指示したと記されていることから裏づけられる [Rā'in 2535 : 72-73]。また同じロシア語略伝はアッバースがタブリーズ蜂起や1909年5月のラシュト蜂起軍によるカズヴィーン制圧にも参加していたとするが、この点も Navā'ī の手許にあるというアッバース自筆の覚書によって確認できるようである [Navā'ī : 45-46]。このようにアッバースがイランにおけるハイダルのいわば補佐役であったとすれば、ロシア滞在期にハイダルに随行していたのは弟のスライマンの方である。ハイダルの異母弟 M. Tari-verdy (図中の Muṣṭafā) が Shamida に提供した情報によると、スライマンはペトログラートの商業学校に在学中の1908年 RSDRP に入党、ペトログラート大学修了後の1916年、同地の石油採掘関係の

会社の法律顧問に就職する一方で、十月革命にも加わり、ペトログラト革命委員会の一部局を担当したといわれる [Shamida 1970 : 16]。その後、ペトログラトに到来したハイダルに同行してトルケスタンに赴いたようで [Rā'in 1358 : 78], 1920年秋に再編された「アダーラト」党中央委員会メンバーにも選ばれている [Shamida 1972 : 94]。2人の実の兄弟以外にも、構成図下方に列挙した9名の従兄弟が立憲革命に貢献したとされる [Rā'in 1358 : 80-81] が、事実ハイダルはロシア語回想記において3名の従兄弟をタブリーズ蜂起支援に同道させたことを伝えている [Rā'in 1358 : 18]。かくして、ハイダルの活動はとりわけその重要な局面においては、兄弟、従兄弟、そして既述のように父親をも含めた、タリヴェルディエフ家一族を挙げての協力体制の上に成り立っていたものと考えられる。

それでは、家族の範囲を越えたハイダルの人的ネットワークとはいかなるものであったろうか。イランでの人的関係は自らが創出した社会民主党や第二次立憲制期以降ではデモクラート党に結集した人々を中心としたものであったことは想像に難くないが、これらの人々のなかでもとくに信頼関係が厚かったと推考される者は、Asadollāh Abo'l-Fathzāde と Ebrāhīm Monshīzāde という人物であろう。そう推定するのは以下の3点の理由による。第一に Mohsen Najmābādī の覚書に両名の名前が頻出すること³⁵⁾、第二にハイダルがテロ行為を示唆する自らの回想を Monshīzāde に対して口述し、最終的にイラン脱出を図る直前にこの両者ともう一人に宛てた書簡を認めていること³⁶⁾、第三に両者は先述の「懲罰委員会」のいわばナンバー・ワン、ナンバー・ツーであり、ハイダル自身、モスクワの集会での演説でこの2人がダームガーン近辺で銃殺された事実と言及していること、である。

ところで、この2人のいずれもがザカフカースからイランに移住した一族 (mohājerīn) の出身であったことは興味深い。彼らはともにロシア人が指揮するカザーク旅団に入隊、将校の階級にまで昇進したが、旅団がロシア人とアルメニア人に牛耳られていることに憤激し、1907年3月に両名とも旅団を辞職、立憲派内の急進派グループに加担した³⁷⁾。「カザーク旅団のロシア人がイランを去らない限り、我が国でのロシアの影響は減じないであろう」という Monshīzāde の感歎は、彼らが立憲運動に身を投じた主要な動機をよく物語っている [Eqbāl 1947b : sh. 6-7, 148]。帝政ロシアによるムスリム支配から逃れた移住者にとって、彼らが祖国とみなすイランで再び民族的抑圧状態を目睹することは、耐え難い屈辱と祖国の独立への希求を抱かせたに相違ないからである。このような感情と体験を共有していたことがハイダルとこの両者を緊密に結びつける一契機であったとし

でも不思議ではなからう。

むすびにかえて

ハイダルが歩んだ軌跡を追うことを主眼としたために、彼が関わった集団や党派について詳述し、そのような全体的構造のなかでハイダルが奈辺に位置づけられるかを十分明らかにしえなかったことを率直に認めざるをえない。またその事績を跡づけることさえ不明な点を多々残したことも否めない。しかし本稿が何がしかの意味をもつとするならば、それは従来の研究においてイランとソヴィエト・ロシアに寸断されがちであったハイダルの活動を統一的に叙述した点にあらう。その結果、確認された諸点を以下に再整理してむすびとしたい。

- (1)ハイダルはイランに移り住む以前から RSDRP の一員で、その後も同党ないしはその周辺組織と関係を保っていたとするなら、政治的には極めて特異な存在であったことは確かである。しかし彼の行動は単に RSDRP の政治方針の観点からだけでなく、当時のイランの政治状況への自己適応という文脈においても理解されなければならない。その一例は彼が一貫して政治テロルを有効な革命闘争の一手段として認識していたことに見出される。これは政治的領域で個人が絶大な権威を行使していた同時代の政治文化への彼なりの洞察があったことと恐らく無縁ではなからう。
- (2)ハイダルが第一次大戦に従軍したことも同じく当時の政治的枠組のなかで考えなければならない。彼がこれに踏み切った最大の要因は、旧来からのデモクラート党関係者との交流関係にあったからである。その意味で、ハイダルは立憲革命の政治勢力の配置図の上では、反対派の呼称を借用すれば「急進派」(tondravān)、「革命派」(enqelābiyūn)の急先鋒であったといえよう。と同時に、彼がこの政治的枠組の枠内に自己を位置づけたがゆえに、そしてイランの独立・進歩とイスラームの再生が混在的に刻印された立憲革命の脈絡においては、同時代のイラン人の目に彼が「ムスリムであり、なおかつナショナリスト」であると映じたのも無理からぬことであらう。
- (3)この印象は全くの幻影であったわけでない。なるほどロシアに移動して以降、ハイダルは国際的共産主義の一面を覗かせはするものの、「エジュテマーユーネ・アーミューン」党の代表を自認していたことが示すように、やはり従前からの活動様式をも保持していたのである。このことは彼の革命観にも反映している。ハイダルは一般的には階級的立場を堅持しつつも、「未完の革命」たる立憲革命の延長線上に来るべき「民族革命」を措定し、それを唱導したからである。

(4)ハイダルの人的ネットワークは彼の拡大家族を根幹に、ザカフカースからの移住者、イラン人急進派へと放射状に広がっていたものと思われる。「ヒンメト」に象徴されるムスリム社会民主主義潮流として最近 M. Bayat が概念化した「ザカフカース・コネクション」(Transcaucasian Connection)を代表する人物として、ハイダルはザカフカースの社会民主主義者と立憲派内急進グループとを介在・連結する機能を果たしていたと考えられる。やや比喩的かつ図式的に要約するならば、ハイダルは思想的にも人脈的にも民族主義(者)と社会主義(者)がクロスする交点に立つ人物であったのではなかろうか。

このような人物が「ギーラーン共和国」を構成した、クーチュク・ハーンを始めとする在地性の強いジャンギャリー勢力とどのように接続するのか、あるいは乖離するのか、それが筆者の次なる課題である。

注

- 1) ペルシア語やアゼリー語ではハイダルはヘイダルと表記しなければならないのであるが、本稿では *EP* 収録の *Hairi* : 365-366で使用される表記法を採った。なお、ハイダルの家族成員などの呼称もこの方式に従った。
- 2) この回想記は1911年2月から4月の間のある時点でハイダルが E. Monshizāde なる人物(後述)に語った内容を基にしたものである。
- 3) かつてのソ連邦のハイダルに対する公式の立場は次のエピソードに象徴的である。ハイダルは「ギーラーン共和国」の内部権力抗争の余波を受けて1921年10月に殺害されるが、その直後の1923年彼の母親の申請に応じてアゼルバイジャン共和国は遺族に年金を支給することを決定していた。スターリン時代後の1968年には、ソ連邦共産党中央委員会付属 ML 研究所がアゼルバイジャン共産党党史研究所の要請を容れて、ハイダルをクラスノヴォーツクで殉死した「バクー・コミューン」の26人のポリシェヴィキ人民委員と同列の地位に叙し、翌年連邦中央政府は年金額を増した[Rā'in 1358 : 85-87, 222-223]。しかしこのような評価も近年の史料の公開や教条の束縛から免れた方法論の定着に伴い、大幅に修正される可能性も十分予想される。それゆえ本稿も今後期待されるロシアやアゼルバイジャン側研究者の成果によっていずれ訂正・補強されなければならないことは言を俟たない。
- 4) アゼリー語版 *Azadliġ Gāhrāmani*, Bakī, 1972, ロシア語版 *Geidar Ami ogly*, Baku, 1973. 筆者はいずれの版も入手できなかったため、東洋文庫所蔵の出版地不詳のアラビア文字表記のアゼリー語版(出版年次は1972年と記される)を利用した。
- 5) この運動を主に内部的視点より考察したものとしては、黒田 1988 ; 1989を参照。
- 6) ムスリム社会民主党「ヒンメト(Himmāt)」創立に関わった N. N. ナリマノフ(1870-1925), M. A.

- アズィーズベコフ(1876-1918), S. M. エフェンディエフ(1887-1938), M. A. ラスールザーデ(1884-1954)はいずれもロシア式学校で勉学を積み,それぞれ専門職として教師,電気技術者,医者,ジャーナリストを選んだ[Bayat : 80-81, 87-88]。
- 7) タリヴェルディエフ家に保存されているこの回想録は1920年にナリマノフの懇請に応じて書かれたという[Shamida 1972 : 21/n. 1]。
- 8) RSDRP の創立大会が開かれた1898年の入党年次は,ハイダルよりも年長のアゼルバイジャン人社会民主主義者,例えば J. A. アーホンドフ(b. 1873)の1901年,ナリマノフの1905年と比べても異例の早さといわざるをえない[Swietochowski 1978 : 134-135/n. 4, 14]。
- 9) この発電所については, Jamālzāde : 95 ; Maḥbūbī : 385-386を参照。
- 10) ペルシア語回想記の英訳文[Sheikholeslami : 37]では,この区別が無視され,“the party [つまり RSDRP] branch in the Caucasus” と訳出されている。
- 11) 「ハイダル・ハーンの偉大なる指導者 V. I. レーニンとの会見(ハイダル・ハーンの回想より)」と題するロシア語文書がタリヴェルディエフ家文書中にあり,それによるとハイダルは1905年にジュネーブ,1906年5月にストックホルム,1908年にパリでレーニンと会談し,その直接的指示を仰いだという[Rāʾīn 1358 : 48]。とすれば,ハイダルがボリシェヴィキの理論的到達点を吸収する機会があったことになるわけだが,但しそれはこの文書の信憑性が保証されることを前提にしていることである。ところが,この文書に記された諸情報は他の史料からは一切確認しえないことに加えて,同文書を Rāʾīn に送付した当の M. Tari-verdy でさえこの文書を全く利用していないように,ハイダルがイラン出国後にレーニンに会ったことにすら懐疑的なのである[Tari-verdy : 87]。いずれにせよ,同文書によれば,ハイダルがレーニンと会見した主たる目的は,理論的問題で教示を請うことよりも,むしろレーニンが RSDRP のザカフカース組織にイラン向けに武器・弾薬・人員・印刷物などを送る指令を発するよう依頼することであったようである。
- 12) Ṣanīʾ od-Doule がイギリス公使館付書記官に開陳した事件の筋書については, Keddīe : 323-324, また Mokhber os-Saltāne の主張については, Eqbāl 1946 : 46-47 ; Mokhber ol-Saltāne : 157-158を参照。
- 13) Sheykh ol-Eslāmī : 3-18に収載された同著者による“Ātābak chegūne koshte shod”を参照。なお,この論文は Sokhan, sh. Mehr-māh(1344 Kh.)に初出。
- 14) Rāʾīn 2535 : 43-44によれば,この覚書は Moḥsen Najmābādī が口述し,‘Abd ol-Hoseyn Navāī が書き留めたもので,22頁からなり,7~9頁が欠落しているという。なお,Moḥsen Najmābādī はアザリー派バーブ教徒とも取り沙汰された著名なテヘランのモジュタヘド Sheykh Hādī Najmābādī の孫である。後者の略歴については, Bāmdād j. 4 : 408-410。
- 15) Malekzāde の構成員リスト[Malekzāde j. 2 : 417]と Najmābādī のそれ[Rāʾīn 2535 : 47-48]を対比してみると,後者のリストに含まれていてしかるべき2人のヴァーエズや急進派新聞の編集

者がみえないのは不可解であるが、それ以外のメンバーは殆ど一致する。両者のいう組織が同一でないかと推測される、より確かな根拠は、第一に両者ともこの組織が立憲運動の統括的機能を(実際に果たしたか否かは別として)担うことを目的にしていたとしていること、第二に Najmā-bādī のいうアンジョマンの名称 *beyn oṭ-ṭolū'eyn* が暗示しているように、この組織の会合が夜半に始まり、夜明け前に終了したことを両者が認めていることである。急進派の高名なリーダーで、アゼルバイジャン選出代議士 S. Ḥ. Taqīzāde も Malekzāde のいう国民革命委員会の実在を大筋において承認し、その会合が夜明け前に散会になったことを想起している(S. Ḥ. Taqīzāde, “Taqīzāde dar bāre-ye qatl-e Atābak sokhan mīgūyad,” in *Sheykh ol-Eslāmī* : 34-39. 同論文は *Sokhan*, sh. Bahman-māh(1344 Kh.)に初出)。

- 16) 暗殺未遂事件の顛末を概説する記事と司法省内刑事法廷の5月14日付判決全文を掲載している“*Mosāvāt*” sh. 24 : 5-7によれば、議会とアンジョマンが抗議した主な理由は、司法大臣や内務大臣が関知しないままシャーがテヘラン知事と市警察当局に被疑者逮捕を命じたこと、任意の家宅捜索が市民の間に不安と動揺を惹き起こしたことなどであった。これらのことが三権分立を謳う憲法に抵触しているとして、議会とアンジョマンは被疑者に対する尋問の公開を要求し、議会代議士4名、アンジョマン代表20名が尋問の場に立ち合って圧力をかけたのである。従って、立憲派にとって、この事件は単に法廷審理という意味にとどまらず、憲法の条項を擁護できるかどうかの政治的試金石でもあったといえよう。
- 17) 同一説については、*Ettehādiye* 1361a : 68-74, 部分的重複説については、*Bayat* : 161-162, 221-222を参照。
- 18) *Rā'īn* 1358 : 25-26. 原文はロシア語タイプで作成され、タリヴェルディエフ家文書中に保存されていたものである。*Rā'īn* の解説によると本声明のペルシア語版は宮廷侍医を介してシャーに手渡されたということだが、その時期は不明であり文中にも日付の記載はない。しかし本文中にシャーが周囲の罪人どもの言葉を信用してはならないこと、憲法を再確認し議会ですれへの忠誠を誓うことの2点が要請されていることから察するに、1907年秋から暗殺未遂事件が起こった1908年2月までの期間にかかるものと思われる。この声明の冒頭部分は写真版で呈示されているが、その他はペルシア語翻訳である。
- 19) タリヴェルディエフ家文書に残されたロシア語回想記において、ハイダルは「イラン革命委員会」(*komīte-ye enqelāb-e Īrān*)と「社会民主党委員会」(*komīte-ye hezb-e sosiyāl demokrāt*)とを互換可能な組織名称として用いていることもまたこの推定を裏づけていよう [*Rā'īn* 1358 : 16-17]。なお、同回想記はペルシア語で訳出されているため、ロシア語表記の名称については不詳である。
- 20) *Rā'īn* 1358 : 17. 'Alī Akbar の派遣目的のなかには“*Mosāvāt*”紙編集者の *Seyyed Moḥammad Rezā Shīrāzī* の救出も含まれていた。*Moḥammad Rezā* のザカフコースへの逃避行を手助けし

た Mohsen Najmābādī の追想は Rā'īn 2535 : 106-108 に, Moḥammad Rezā 自身のテヘラン脱出からザカフカースに逃げる道程での苦難を物語る記事は “*Mosāvāt*” sh. 27 : 3-4 にみえる。ハイダルの父親が Moḥammad Rezā を助け出した事実は Taqīzāde によっても確認されている [Taqīzāde : 460-461]。

- 21) 近現代イランの文化的価値・規範と政治システムとの相関関係を概括的に論じた著作のうちで, M. R. Behnam は伝統的な社会的価値意識に権威への忍従と不信という両義的反応が同時並行的に伏流していたが, 権威を行使する者にとってもそれに反抗を企てる者にとっても, その表出回路は公的なものでなく, 個人的性格を帯びていたのであり, それゆえ血縁・地縁などの個人的ネットワークを基本に組成された集団的連帯性は個人の交替に伴い容易に離合集散を繰り返すものであったことに着目している [Behnam : chap. II, IV]。歴史学的視点から20世紀イランの政治文化を観察した M. R. Ghods も「イランにおける政治とは個人(personality)の機能である」 [Ghods : 2] としている点は傾聴に値しよう。
- 22) この見解を含むデモクラート党に関する優れた研究としては, Etteḥādīye 1361a : 198-225。また, デモクラート党の暫定綱領・規約の全文は, Etteḥādīye 1361b : 3-19 に収録されている。
- 23) Afshār : 249-250。Pilossiantz はハイダル本人に別便でテヘラン残留を忠告していたが, ハイダルはその書簡が届かないうちにカラ・ダウに出向いたようで, 1910年2月10日付書簡でハイダルの「存在が現実的状况として必要である」ことを再び Taqīzāde に強調している [Afshār : 264-265]。
- 24) 日付不明であるが内容からみて1911年3月下旬のものと同定される書簡のなかでハイダルは次のように記している。
- 「・・・私はコム, カーシャーン, エスファハーンで組織の基礎を置き, それを完成させた。そして将来の選挙に備えては, エスファハーンまでのこの地方からは, 国民議会と地方アンジョマンの代表全てが祖国を愛する者(vāṭan-parast)から選ばれるものと確信することができる。この他, 私は各々人口3千名程のエスファハーンの4つの大きな村に党支部を結成した。・・・」 [Rā'īn 2535 : 192]。
- 25) 移動経路については幾つかの説がある。Eqbāl はハイダルの一友人がシーラーズの立憲派指導者の一人に送った手紙中に, ハイダルがボンベイに向かう旨の記載があることを基に, ベルシア湾からボンベイ経由というルートを推測した [Eqbāl 1947a : 77]。他方, Navā'ī は Taqīzāde から聞いた話として, ハイダルとティフリスのある社会民主主義者が共謀して, 当時オデッサに身を寄せていた前シャーのモハンマド・アリーから多額の現金を詐取したことを紹介し, これに基づいてカフカースからロシア経由という道筋を想定した [Navā'ī : 56-57]。しかし Maḥmūd Khān Pahlavī が回想録でエスファハーン方面への旅行からハイダルが戻った後, 自分の邸宅に潜伏し, 彼の援助でマシュハド→アシュハーバード→ロシアと進んだことを証言する [Ādamīyat

- : 335]に及んで、殆どの伝記作者がこの説を踏襲するようになった [Rāʿīn 2535 : 175 ; Rezāzāde Malek : 203 ; Shamida 1972 : 55]。
- 26) この親独・反英露的な結社とその機関紙 “*Kāve*”については, Mahrad : 43-67.
- 27) 前に紹介した1919年4月10日のモスクワ集会でのハイダルの肩書は, 在ロシア・「エジュテマーユーネ・アーミューン」党代表, モスクワ細胞議長であった。それよりほぼ1か月前のコミンテルン創立に関する意見表明においても, ハイダル(但しラジャブ・ボンビーなる変名で)はベルシア社会主義革命党「エジュテマーユーネ・アーミューン」代表という肩書を使用している [“*Izvestia*” 6 III 1919 : 3]。
- 28) A. スルターンザーデ(1889-1938)はイラン領アゼルバイジャンのマラーゲのイスラーム改宗アルメニア人家庭に生誕。エッチミアジンのアルメニア聖職者学校修了後, ベテルブルクで高等教育を受け, 1912年頃 RSDRP に入党。1919年「アダーラト」党に参加, 指導的理論家として頭角を現し, コミンテルン第2回大会で執行委員に選出された。その後の彼の経歴や著作については, Chaqueri 1975 : 16-24 ; Chaqueri 1984 : 215-235.
- 29) Shamida はこの大会の決議集からハイダルが提議した5項目のテーゼを全文引用しているが, それらはいずれも世界情勢全般に関わるもので, イランの政治状況には一切触れていない [Shamida 1972 : 73-75]。これはイランでの革命展望や戦術を論じたスルターンザーデらの報告と全く対照的であり, この大会に占めるハイダルの比重の程を逆に暗示しているのかもしれない。スルターンザーデのこの政治報告は, コミンテルン第2回大会に提出され, 植民地・従属国における革命戦略をめぐって席上レーニンとの論争を惹起した「東方における社会革命の展望」と題するスルターンザーデ・テーゼの雛型となったものである。論争に至る経緯と論点については, Persits : 41-46 ; Ravasani : 275-278.
- 30) 「アダーラト」党は1919年秋から党名をイラン共産党「アダーラト」とも名乗っていたが, 正式の変更はこの創立大会で行われた。1920年6月4日の「ギーラーン・ソヴィエト共和国」宣言を承けて, 党の戦略・戦術を定礎するために開かれたこの大会の史的検討は, 「ギーラーン革命」の全体的文脈のなかでなされるべきだと思われるので別の機会に譲ることにしたい。大会の簡略な議事録については, Chaqueri 1975 : 89-94. 大会で採択されたといわれる党綱領(原文ロシア語)の独訳は, Ravasani : 541-556, その評価については, Agaev : 40-42 ; Ravasani : 267-274.
- 31) Rūstā の註記によると, この演説はペトログラートの新聞に報じられたが, その写しはタリヴェルディエフ家文書中に保存されているという [Rūstā : 67/n. 1]。
- 32) Shamida はこの他にも「諸民族の生活」紙に現れた若干の論文(例えば Ips の署名入りで “*ZhN*” 18(26), 19(27), 20(28) [それぞれ1919年5月18日, 5月25日, 6月1日付]に連載された「ベルシアにおける社会主義宣伝の任務と条件」)をペトログラート集会の演説内容と対照させる方法を通じて, これらがハイダルの手になるものとの結論に到ったと主張している [Shamida 1972 :

69-71]が、このような方法には多分に主観的判断が含まれるので、ここでは G. T. 署名入りのイランに関する同論説のみを考察対象にした。

- 33) Fatemi はハイダルの発言を大会速記録からではなく、最初の発言を “*Kāmūnist*” 紙(1920年9月29日付)、2度目のそれを “*Enqelāb-e Sorkh*” 紙(同年10月15日付)から引いている。遺憾ながら筆者は実物を披見しえていないので、発言がこれらの新聞に掲載された経緯については現在のところ不明である。
- 34) これは本稿の問題関心を遙に越える事柄であり、なおかつソヴィエト・ロシアの外交政策や革命戦略の全体的枠組のなかで数多くの検証を要する問題であろう。ただスルターンザーデを代表とする左派コムニストを後押ししたのが民族問題人民委員のスターリンであったとする説 [Blank : 181] は正鵠を射ていないように思われる。むしろ Ghods が想定する、コミンテルン議長ジノヴィエフとスルターンザーデとの提携を一方の極に配し、他方の極にスターリンとハイダルとの連携を配し、その中間にレーニンと外務人民委員のチチェーリンを置く図式の方がその後の事態の進展に徴しても説得力をもっているように思える [Ghods : 83-86]。いずれにせよ、この Ghods 説も十分な典拠が示されているとはいえ、より実態に即した構図を描くにはなお一層の立証作業が必要であろう。
- 35) 例えば、先に触れた Hasan Āqā は Monshīzāde の家に一週間匿われ、またハイダルは Abo'l-Fathzāde の家で爆弾の部品製造を行ったといわれる [Rā'īn 2535 : 73, 78]。
- 36) この書簡の一部は本稿註(24)に引用した。
- 37) Abo'l-Fathzāde の経歴については、Bāmdād j. 1 : 111-113, Monshīzāde のそれに関しては、Eqbāl 1947b : sh. 6-7, 143-151 ; sh. 8, 45-57を参照。

参考文献

[ペルシア語文献]

Ādamiyat, Ferīdūn

1340 Kh. : *Fekr-e Āzādī va Moqaddame-ye Nahzat-e Mashrūṭiyat-e Īrān*, Tehrān.

Afshār, Īraj (ed.)

1359 Kh. : *Ourāq-e Tāze-yāb-e Mashrūṭiyat-e marbūt be Sāl-hā-ye 1325-1330 Qamarī*, Tehrān.

Amīrkhīzī, Esmā'īl

2536 Sh. : *Qiyām-e Ādharbā'ijān va Sattār Khān*, 2nd ed., Tehrān.

Bahār, Malek osh-Sho'arā'

1323 Kh. : *Tārīkh-e Mokhtasar-e Ahzāb-e Siyāsī, Enqerāz-e Qājāriye*, Tehrān.

Bāmdād, Mahdī

1363 Kh. : *Sharḥ-e Hāl-e Rejal-e Īrān dar Qarn-e 12 va 13 va 14 Hejrī*, 6 vols., 3rd ed., Tehrān.

Eqbāl, ‘Abbās

1946 : Qātel-e Ḥaḡiqī-ye Mīrzā ‘Alī Aṣghar Khān Atābak, *Yādgar*, sāl-e 3, sh. 4.

1947a : Ḥeydar Khān ‘Amū Ūghlī, *Yādgar*, sal-e 3, sh. 5.

1947b : Sharḥ-e Ḥāl-e Marḥūm Mīrzā Ebrāhīm Khān Monshīzāde, *Yādgar*, sāl-e 3, sh. 6-7, 8.

Etteḥādīye, Maṣṣūre (Nezām-e Māfī)

1361 Kh. a : *Peydāyesh va Tahavvol-e Ahzāb-e Siyāsī-ye Mashrūṭiyat*, Tehrān.

1361 Kh. b : *Marāmnāme-hā va Nezāmnāme-hā-ye Ahzāb-e Siyāsī-ye Īrān dar Dovvomīn Doure-ye Majles-e Shūrā-ye Mellī*, Tehrān.

Jamālzāde, Moḥammad ‘Alī

1335 Q. : *Ganj-e Shāygan*, Berlin.

Kasravī, Aḥmad

2536 Sh. : *Tārīkh-e Mashrūṭe-ye Īrān*, 13th ed., Tehrān.

Maḥbūbī, Ḥoseyn

1368 Kh. : *Tārīkh-e Mo’assesāt-e Tamaddonī-ye Jadīd dar Īrān*, j. 3, Tehrān.

Malekzāde, Maḥdī.

1363 Kh. : *Tārīkh-e Enqelāb-e Mashrūṭiyat-e Īrān*, 7 vols., 2nd ed., Tehrān.

Mokhber os-Saltane, Hedāyat

1361 Kh. : *Khāterāt va Khatarāt*, 3rd ed., Tehrān.

Mosāvāt, sh. 24 [23 Rabī II 1326 Q.], sh. 27 [7 Moharram 1328 Q.].

Navā’ī, ‘Abd ol-Ḥoseyn

1949 : Ḥeydar ‘Amū Ūghlī va Moḥammad Amīn Rasūlzāde, *Yādgar*, sāl-e 5, sh. 1-2.

Qazvīnī, Moḥammad

1347 Kh. : *Rūznāme-ye Dourān-e Eqāmat-e Orūpā*, in Ī. Afshār (ed.), *Yād-dāsh-t-hā-ye Qazvīnī*, j. 9, Tehrān.

Rā’īn, Esmā’īl

2535 Sh. : *Ḥeydar Khān ‘Amū Ūghlī*, 3rd ed., Tehrān.

1358 Kh. : *Asnād va Khātere-hā-ye Ḥeydar Khān ‘Amū Ūghlī*, n. p.

Rezāzāde Malek, Raḥīm

1351 Kh. : *Chakīde-ye Enqelāb Ḥeydar Khān ‘Amū Ūghlī*, Tehrān.

Rūstā, Rezā

1341 Kh. : *Zendegī va Fa’āliyat-e Yekī az Darakhshāntarīn Mardān-e Enqelābī-ye Īrān*, *Donyā*, sāl-e 3, sh. 4.

Sheykh ol-Eslāmī, Javād

1367 Kh. : *Qatl-e Atābak va Shānzdah Maqāle-ye Tahqīqī-ye Dīgar*, 2nd ed., Tehrān.

[その他の文献]

Agaev, S. L. i V. N. Plastun

1976 : Iz istorii razrabotki programmy i taktiki iranskoj kommunisticheskoj partii v 1920-1921 gg, *Narody Azii i Afriki*, 3.

Bayat, M.

1991 : *Iran's First Revolution : Shi'ism and the Constitutional Revolution of 1905-1909*, New York & Oxford.

Behnam, M. R.

1986 : *Cultural Foundations of Iranian Politics*, Salt Lake City.

Blank, S.

1980 : Soviet Politics and the Iranian Revolution of 1919-1921, *Cahiers du monde russe et soviétique*, XXI, 2.

Chaqueri, C.

1975 : *A. Sultanzadé, politische Schriften, 1*, Florence.

1984 : Sultanzada : The Forgotten Revolutionary Theoretician of Iran : A Biographical Sketch, *Iranian Studies*, 17.

Fatemi, N. S.

1952 : *Diplomatic History of Persia 1917-1923*, New York.

Ghods, M. R.

1989 : *Iran in the Twentieth Century: A Political History*, Boulder & London.

G. T.

1920 : Sotsial'naiia baza persidskogo perevorota, *Zhizn' Natsional'nostei (ZhN)*, 18(75), 15 VI.

Hairi, A. -H.

1982 : Ḥaydar Khān 'Amū Ūghlī, *EP*, supplement, fascicules 5-6.

Izvestia, 6 III 1919, 13 IV 1919.

Keddie, N. R.

1971 : The Assassination of the Amīn as-Sulṭān (Atābak-i A'zam), 31 August 1907, in C. E. Bosworth (ed.), *Iran and Islam*, Edinburgh.

Khayrutdinov, R. G.

1977 : Iranskie internatsionalisty v sovetskoi Rossii (1918-1920), *Narody Azii i Afriki*, 6.

黒田 卓

1988 : 第一次大戦期イランにおけるジャンギャリー運動(I)『香川大学教育学部研究報告第 I 部』, 74.

- 1989 : 第一次大戦期イランにおけるジャンギャリー運動(Ⅱ)『香川大学教育学部研究報告第Ⅰ部』, 75.
- Mahrad, A.
1983 : *Die deutsche Pénétration pacifique des iranischen Pressewesens 1909-1936*, Frankfurt am Main.
- Persits, M. A.
1974 : Ideinaia bor'ba po problemam sootnosheniia kommunisticheskogo i osvoboditel'nogo dvizhenii na Vostoke v period II kongressa Kominterna, *Narody Azii i Afriki*, 5.
- Plastun, V. N.
1972 : Uchastie iranskikh trudiashchikhsia v grazhdanskoi voine v Rossii, *Narody Azii i Afriki*, 2.
- Ravasani, S.
1973 : *Sowjetrepublik Gilan, die sozialistische Bewegung im Iran seit Ende 19. Jh. bis 1922*, Berlin.
- Shamida, A. I.
1970 : *Lenin i Iran*, Baku.
1972 : *Azadliq Qährāmani*, n. p.
- Sheikholeslami, A. R. & D. Wilson
1973 : The Memoirs of Ḥaydar Khān 'Amū Ūghlū, *Iranian Studies*, 6.
- Sobahi, H.
1990 : *British Policy in Persia, 1918-1925*, London.
- Sultan-zade, A.
1920 : Revoliutsionnoe dvizhehie v Persii, *ZhN*, 28(85) [16 IX], 29(86) [24 IX], 30(87) [1 X].
- Swietochowski, T.
1978 : The Himmät Party : Socialism and the National Question in Russian Azerbaijan 1904-1920, *Cahiers du monde russe et soviétique*, XIX, 1-2.
1985 : *Russian Azerbaijan, 1905-1920: The Shaping of National Identity in a Muslim Community*, Cambridge.
- Taqizade, S. H.
1960 : The Background of the Constitutional Movement in Azerbaijan, *MEJ*, XIV, 4.
- Tari-verdy, M. A. i A. I. Mageramov
1971 : Khaidar-khan amu-ogly, *Narody Azii i Afriki*, 5.